

欧州のOA推進への取り組み -組織の構成・機能についての調査

2025.05.13 (火)

COAR Annual Conference 2025

Internal discussion: OA acceleration programme

一橋講堂

京都大学農学部図書室 小杉 茉菜

京都大学法学部図書室 青木 真奈

KYOTO UNIVERSITY

京都大学



<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

調査の背景と目的

- 大学図書館(研究図書館)の役割が変化している
 - オープンサイエンスの進展により、大学図書館には蔵書構築や情報提供にとどまらない研究のライフサイクルに沿った支援の実施が求められている
 - 2000年代頃から欧米の大学では図書館にOffice of/for Scholarly Communication (OSC)を設置し、研究者をサポートしている
 - 例:ハーバード大、スタンフォード大、カリフォルニア大、ケンブリッジ大 etc.
- 各国のOSCを知り、京都大学図書館の将来を考える礎としたい
 - 欧米各校のOSCは何をし、何をしないのか
 - どのような組織・体制なのか
 - 国／地域／大学ごとにどのような違いがあるのか
- 京都大学ではアメリカ(東海海岸・西海岸)、イギリス、フランス、ベルギーの大学を調査した

ケンブリッジ大学(英)

- 名称:The Office of Scholarly Communication
- 設立背景:2015年にイギリスの国家政策(REF)に対応して設立
- スタッフ構成:14名
- 事業内容
 - データ管理やオープンアクセスに関すること
 - 現在はオープンリサーチにも力を入れている
- 特色
 - OSCスタッフの中にオープンリサーチアドミニストレーターという役職があり、ケンブリッジ全体でオープンリサーチに関心のある人々のコミュニティを構築する役割を担っている。
 - 学術コミュニケーションスペシャリストという出版、ダイヤモンドオープンアクセス、オープンモノグラフの専門知識を持つ人もいる。
 - スタッフの中には、研究職からキャリア変更してきた人が複数いる。

ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(LSE)(英)

- チーム名:Open Research Services team
- 設立背景
 - もともとリサーチサポートと呼んでいたが、オープンリサーチに関する業務が増えたため、オープンリサーチと命名した。
→学内でのプレゼンスが向上
- スタッフ構成:10名
- 事業内容
 - 現在のサービスは、リポジトリなどのOAに関すること、研究情報分析、RDM、など広範囲にわたる。
 - 最近はLSEの研究戦略のもと、オープンリサーチに関するサービスを充実。

ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(LSE)(英)

- その他
 - Open Research Services teamとは別に、Open Research Working Groupというオープンリサーチを推進するためのLSEの非公式なグループがある。
 - 図書館職員3名とLSE内の各分野の研究者で構成されている。
 - オープンリサーチに関する教員側のニーズを把握する場所として機能している。

オックスフォード大学(英)

- 名称:Open Scholarship Support(OSS)
- 設立背景
 - 2020年に外部資金調達に対応するために設立。
- スタッフ構成:9名
- 事業内容
 - オープンアクセス・オープンリサーチ、RDM、著作権とライセンス、デジタル保存、デジタルイノベーション
- 特色
 - OSSのスタッフは、以前からオックスフォードで働いていた人、他大学で研究職についている人など様々。
 - 学内の研究関連の様々な部署(ITサービスやリサーチサービスチーム)とも連携している。

ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン (UCL)(英)

- 名称:Office for Open Science and Scholarship(OOSS)
- 設立背景
 - 2018年にヨーロッパ研究大学連盟 (LERU)によって発表されたオープンサイエンスの8つの柱に基づき、2020年10月のオープンアクセスウィークに正式に設立された。
- 事業内容(8つの柱)
 - 1.学術コミュニケーションの未来(Future of Scholarly Communication)
 - 現在の学術出版モデルを完全なオープンアクセスへと移行するという意図があり、OOSSの最も重要な柱の1つ。
 - 2.FAIR データ(FAIRData)
 - 研究成果への障壁を下げ、潜在的な二次研究者が研究成果を見つけ、再利用して、新たな研究機会を実現できるよう、既存のリソースを最大限に活用することが目的。

ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン (UCL)(英)

- 事業内容(8つの柱)続き
 - 3.教育とスキル(Education & Skills)
 - 研究者がオープンサイエンス、データ管理の知識・スキルを得られるように支援する。
 - 4.報酬(Rewards)
 - オープンサイエンスに携わる研究者への報奨として、オープンサイエンスの実践への取り組みを学術昇進の枠組みに組み込んでいる。
 - 5.次世代メトリクス(Next Generation Metrics)
 - 研究の品質を評価する際に、計量書誌学を活用する方法へ思考の転換を促進し、単なる引用数やジャーナルの影響度を越えたものを目指している。
 - 6.市民科学(Citizen Science)
 - UCL における市民科学のアプローチと活動の定着を提唱し、サポートしている。
 - 7.研究インテグリティ(Research Integrity)
 - 研究者が誠実に、信頼でき、自らの行動に責任を負うことができるよう、研修などを実施している。
 - 8.欧州オープンサイエンスクラウド(European Open Science Cloud)
 - 国レベルの取り組みとなるため、この柱に部署は当てはめられていない。

ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン (UCL)(英)

- 特色

- 既存の部署を7つの柱(OOSSの事業の分野)の各項目に当てはめる形で組織されている。
- 大学の各部署や研究グループと連携して、大学全体のOSを推進する、インクルーシブな組織となっている。
- 研究者ができる限りシンプルなメッセージを受け取れるよう、メッセージを一元化した。
 - OOSS コーディネーターによって、各部署がOOSSとしてまとまって活動できるように管理している。

ストラスブール大学(仏)

<組織構造>

研究局
(Research Office)

図書館サービス
(Library Services)

IT部門
(IT Department)

3つの機関が協力:ストラスブール大学外からの参加もある

ストラスブール大学(仏)

<大学外との連携>

- ・ADELE ヘルプデスク

研究データに関するあらゆる問題について情報提供と支援を行う地域ネットワーク(ストラスブール大学、アルザス国際科学大学、アップリケ国立科学研究所、アルザス国立大学、ストラスブール国立図書館)

- ・MISHA(アルザス社会科学・人文科学学際施設)

ストラスブール大学出版局のパートナー

フランス国立科学研究中心(CNRS) とストラスブール大学から出向した約 15 名のエンジニア、技術者、管理スタッフで構成されている。オープンサイエンス出版の支援に特化した部門がある。

ロレーヌ大学(仏)

＜組織構造＞ ロレーヌ大学のオープンサイエンス運営委員会

副学長とプロジェクトマネージャー

中央局代表

研究コミュニティ代表

外部関係者

運営マネージャー

ロレーヌ大学(仏)

<大学外との連携>

・FRENCH OSMユーザークラブ

2022年にフランス高等教育・研究省とオープンアクセスモニター作成のためのユーザークラブを作成。

目標:互いに助け合い、経験を共有し、図書館からフィードバックを得る。
約250人がクラブに所属しており、主に図書館員。

・研究サポートネットワーク

ロレーヌ地域全体に及ぶネットワーク

京都大学

ブリュッセル自由大学(白)

<組織構造>

DBIS (Département des bibliothèques et de l'information scientifique) : 図書館・科学情報部

フルタイム

部門長

研究支援コーディネーター

DBIS IT／イノベーション
サービス責任者

ITイノベーションスペシャリスト
／デジタル化プログラム責任者

パートタイム

横断的トレーニングチームの司書5名

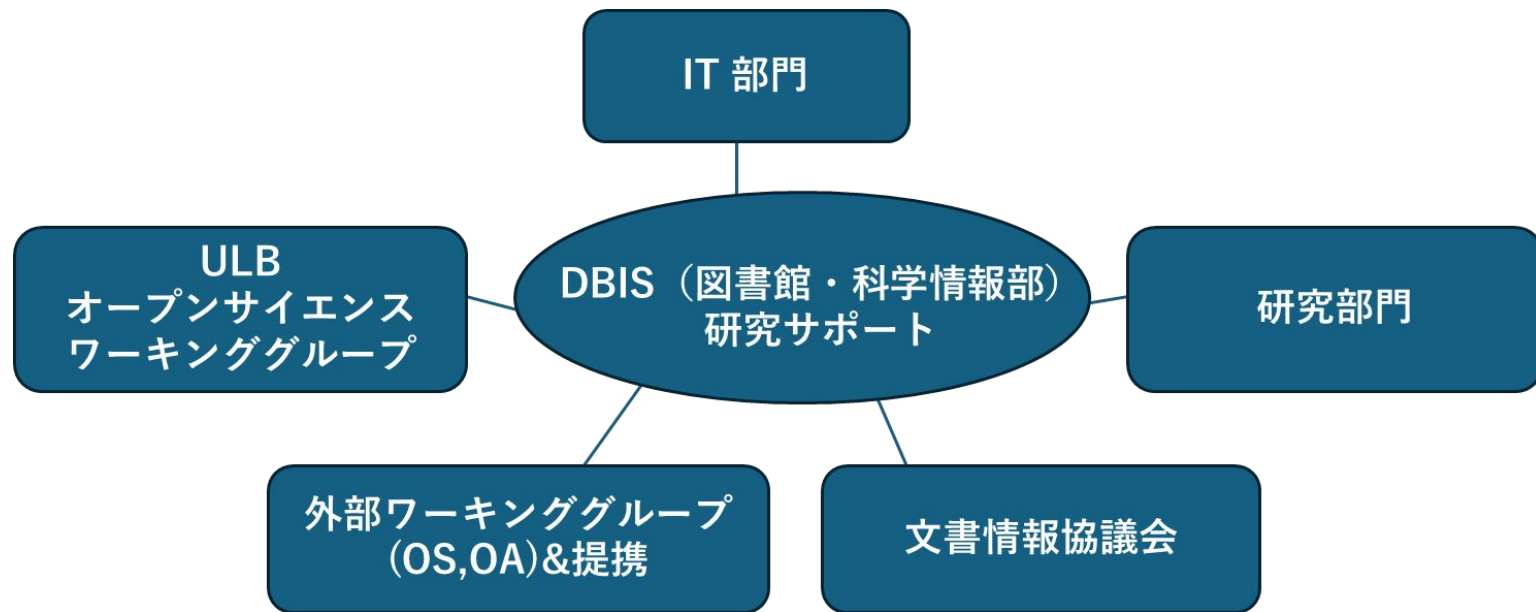
各図書館に1～2名の司書
(専門分野の文献調査・
参考文献ツールのトレーナー
+ 個別サポートセッション担当)

所属機関リポジトリ サポート
／ヘルプデスク担当 (2名)

データ管理計画の校正に参加してい
る司書(7名 - ULBデータ責任者／
研究部門と協力)

ブリュッセル自由大学(白)

<DBIS(図書館・科学情報部)と他の組織との連携>



欧州まとめ

- OSC(図書館)以外の部門との連携も強く、大学全体のOAに対する意識が強い。
- 各大学のOSCには、研究職からキャリア変更してきた人が複数いる。
 - 研究のフローが分かっている人がいることがプラスになっていて、研究者との距離も近い。
- 研究者に対するメッセージの伝え方・発信を意識している。
 - これはあなたがしなければならないことであり、それを私たちがどのように助けるか、どのようなサービスを提供するか、を伝える。

調査の結論と京都大学図書館が目指す姿

- **OSCは機能である**

- 固定的な組織整備や人員配置ありきではない
- 学術情報の創出や発信を担う関連組織が協働して研究者を支援する、時代やニーズに適った複合的・複線的な機能群＝それがOSC

- **京都大学図書館にOSCを置くとしたら？**

- 全学の図書館・室の共通基盤として研究支援を展開したい
- 大学構成員の研究に必要な学術情報の受発信を支えたい
- 研究成果のオープン化・可視化・国際広報に寄与したい
- 各国のOSCを参考に、持続的に機能を拡張したい